

聖トマス・アクィナス司祭教会博士の記念日の説教

金トマス・アクィナス 神父 2010年1月28日(木)

(金 大烈・ザベリオ神父様の同時通訳にて)

《聖人となる秘訣》

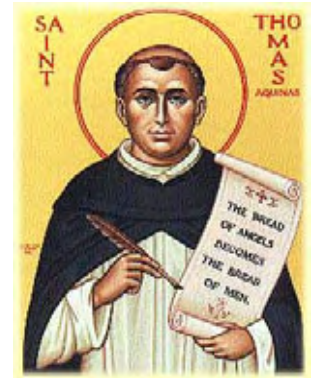
こんばんは。カトリック信者は、誰でも洗礼を受けるときに洗礼名をいただきます。洗礼名となった聖人は、その人の生涯に、いつも保護者として存在します。求道者の場合は、まだ洗礼名がありませんね。洗礼名は、洗礼を受けた一つの印です。

全ての聖人には、みんな祝日があります。聖人の祝日を迎えたら、その洗礼名を持っている人々を必ず祝います。ほとんどの聖人たちには、祝日があります。しかし、あまり知られていなくて、説話や伝説のように伝えられているだけで祝日ははっきりしない聖人たちもいますね。そのように、祝日ははっきりわからない聖人は、11月1日(諸聖人の日)が祝日となります。

日本ではどのようにしているかわかりませんが、韓国では祝日と言えば、とても大きな祝い日となります。たとえば、洗礼名にその聖人の名前を持つ信者の代父や代母は、自分の霊的な息子、娘のためにミサを捧げます。そしてその息子、娘の家を訪れて食事を一緒にしようとするのがふつうです。特に司祭の祝い日には、信者が司祭のために本当に心をこめて祝うつもりでミサに与ります。私が、わざわざ自分の祝い日にあたる期間を選んで日本に来たわけも、そこにあります。私のために、いろいろなところから、たくさんの人々が祝いに来ます。そしていろいろなプレゼントを贈ろうとします。霊的なプレゼントだけでなく、物も贈られてきます。私はそういうことに少し負担を感じて、ここに逃げてきたのです。おそらく私の小教区では、祝うためにいろいろなところから人々が来ていると思います。韓国から持ってきた携帯電話にはメールがたくさん届いていました。数えてみたら120通もありました。その人々に感謝のメッセージを送りました。中には、日本で暮らしているある韓国の信者から「私は、日本から韓国に来ているのですが、神父様は今どちらにいらっしゃるのですか。」という質問もありました。それで「私は今、日本に来ていますよ。あそこでよく楽しんで下さい。^^」と答えました。自分の祝い日に小教区から離れているのは、今回が初めてです。信者が苦勞をしないで済むように逃げて来たのです。

日本の教会では祝い日をどのように迎えるのか、弟であるサベリオ神父から聞いたことはありません。フランシスコ・サベリオの祝日がいつであるかご存知でしょうか。12月3日ですね。皆様ご存知ですよ。もちろんその祝い日には、皆様の担当司祭のために心をこめて祝っているのでしょうか。たくさん霊的な花束を捧げているのでしょうか。ごちそうも差し上げて、祝っているのでしょうか。

1年に1回の司祭の祝い日に心をこめて祝うことが、信者の基本的な精神だと思います。そして信者の皆様もお互いの祝い日をよく覚えて、お互いに支えあい、祝いあう習慣や心遣いを持つことが、何よりも必要でしょう。霊的な息子、娘達は、代父、代母の祝い日を覚えなければなりません。逆に代父、代母もその子ども達の祝い日をよく覚えて祝わなければなりません。



聖トマス・アクィナス

今日第一朗読を読んでくださった方も、トマス・アクィナスの洗礼名をお持ちであると聞いています。おめでとうございます。(拍手👏👏👏) このように祝わなければなりません。サベリオはどうしているかわかりませんが、私はミサの中でその日祝い日を迎えている人がいるかどうか尋ねます。そして手をあげさせ、立ち上がらせて、みんなで拍手をして祝う時間をとります。

そして祝うだけでなく、ご自分の洗礼名である聖人の模範ならに倣おうとする努力も必要です。洗礼名に聖人の名前をいただくと、本当にその聖人と似て来るのです。たとえば、セシリアと名づけられた方がいらっしやいますね。聖女セシリアは歌が上手でした。だから、セシリアという名前を持っている信者は、大体歌が上手です。同じように、トマス・アクィナスは学問に優れていました。だから私も勉強ができました。(大笑い) トマス・アクィナスは、ドミニコ修道会の司祭でした。ほとんど一日中、いすに座ってテーブルに本をのせ、勉強をしていました。だから、ものすごく太っていたそうです。どのくらいお腹が出ているか測れなかったそうです。10年前に、トマス・アクィナス聖人のいらっしやったドミニコの修道会を訪れました。彼が使ったテーブルも直接見ることができました。本当に驚きました。食卓もテーブルも全部、お腹の前を自分のお腹の形にあわせて、くぼませてありました。だから私も一生懸命にお腹が出るように頑張っています。(笑)

教会では、聖人聖女が亡くなると直接天国に入れると言われていています。しかし私たちのような一般信者は、亡くなってもやはり煉獄を通らなければなりません。それでは、聖人たちはどのような生き方をしたから直接天国に入れるのでしょうか。これは、今日皆様に申しあげる話の核心的な話になります。聖人たちは、二つの理由のために直接天国に入れると考えられています。

一つは、聖人たちはほとんど毎日、《今日が最後の日のような生き方をした》ということです。朝目が覚めたら、「今日は私の生涯の最後の日になるだろう」と思いながら一日を迎えます。一日しか残っていないのですから、罪を犯す時間がないのです。一日しか残っていないから、1秒、1分、1時間がとても大切です。もし一日しか残っていないと言われたら、私たちには赦せない人はいなくなるでしょう。一日しか残っていないということは、“その日捧げるミサは最後のミサになる”、ということです。皆様にも、今日のミサが生涯の最後のミサになる可能性はあります。寝ている間に神様に呼びかけられたら、どうしようもないからです。今日1日を最後の日と思って生きれば、無駄なことに心を使わないでしょう。“これが最後のご聖体になるかもしれない”、と思えば自然に涙が出るでしょう。

私は6年間刑務所の司牧もしてきました。だから、死刑囚の人々とよく出会いました。死刑を宣告された人々は、ミサには与れません。ですからミサが終わってから、彼らにご聖体を運びます。その人たちは、ミサが始まる前から手を合わせて、司祭を待ちます。私が近づいていく足音が聞こえた途端に、涙を流しています。ご聖体を授けようとしても、涙だらけでそれをいただけない姿がよく見られます。「このご聖体をいただいた後、1か月たたないと神父様はお見えにならない。しかし、その1か月の間に自分が死んでしまうかもしれない。だから、これが最後のご聖体になるかもしれない。」という恐れがあったのです。彼らは、「これが最後のご聖体になるだろう」と思いながらご聖体をいただいて、そして死刑執行の時になると刑場に行くのです。

広い意味では、私たちはみんな死刑を宣告されています。50年後にこの席に残っている人は一人もいないでしょう。いつ死ぬか、それは誰にもわかりませんよね。しかし、必ず死ぬことは分かっています。来年、私がまたここに来た時に、この中にはいなくなった方もいるかもしれません。また、

私自身がその一年の間に、神様に呼びかけられるかもしれません。そういう意味では、私たちはみんな死刑を宣告された立場です。

いつも本当に不思議に思うことは、“カトリック信者の死刑囚は死の受け入れ方がとてもすばらしい”ということです。七人の死刑囚が刑に処される場に立ち会ったことがあります。その人々の死に顔は、本当におだやかで、不思議に思う体験をしました。そのように勇気を持って死を受け入れられる力は、どこから来るのでしょうか。おそらく月に一回いただけのご聖体からの力でしょう。望めば、私たちには毎日でもいただけるこの同じご聖体です。それなのに、毎日いただいている私たちは、慣れてしまって鈍くなってしまい、感謝の心を忘れてしまうことがよくあります。

聖人の方々は、今日が最後の日だと思いながらご聖体をいただいていた。だから、いつも涙だらけのミサだったと思います。聖人達の共通点、聖人になる一番目のポイントは、『「今日が最後の日になるかもしれない」と思い、最後の日のような生き方をする』ということです。一日しか残っていないと思えば、私たちは先に手を伸ばさずにはいられません。もし、自分には罪がないと言われても、自然に相手に赦しをいただくとするでしょう。このような生き方を、神学的な用語で『終末論的な生き方』と言います。

二つめのポイントについて申し上げます。絶対に他の人にあげてはいけないものがあります。聖人たちは、人々のために自分の命さえ捧げました。しかし、“これだけは絶対にあげられない”というものがありました。どの人が、「欲しい」と言ってもあげられなかったものがありました。聖母マリア様が「ください」とおっしゃってもあげられなかったものがありました。教皇様が「差し出さない」とおっしゃっても差し上げられなかったものがありました。イエス様が「従順しなさい」とおっしゃっても従順できなかつたものがありました。聖人たちが絶対譲れなかつたものが何であるか、皆様はご存知でしょうか。それは、『十字架』です。別の言葉で言えば『苦痛』です。「いろいろな『苦痛、痛み』をとおして償うこと」です。そのことについては、絶対譲ることができませんでした。

この世の中で私たちが行う償いの中で、意味のないものは一つもありません。私たちはいろいろな罪を犯します。その結果として、罰を受けなければなりません。司祭が赦しの部屋で授ける償いを実践するだけでは足りないのです。そのような、果たしきれない償いや残っている罰「残罰(ざんぱつ)」(これは、日本語にはない言葉ですね)があります。果たせなくて残った償い、そして気付かなくてできなかった償い、その償いのために罰が残り、そのために私たちは直接天国に入ることができないのです。残っている罰を煉獄で浄化するのです。

聖人と言われる人々は、生きていううちにその償いを完璧に果たせた人々です。残っている罰がないのです。そういう意味で、「煉獄を通らずに、直接天国に入れる」と教会は教えているのです。

さあ、今日申しあげたことをまとめてみます。聖人になるための一つ目の秘訣は、《今日一日が最後の日のような生き方をする》ということです。二つ目の秘訣は、《自分の前に償う機会が与えられたら、絶対譲らないで、自分で果たす》ということです。

ご存知のように、トマス・アクィナス神父様は大神学者でした。そんな立派な方なのに、この二つについては徹底的に行われました。このような二つの面を黙想できれば、私たちは自然にへりくだる心を持つことになります。

皆様、この二つについて頑張ってみましょう。自分のものになるように、努力をしてみましょう。

目が覚めたら何よりも最初に、十字架を切りながら、「今日が、私の生涯で最期の日になるかもしれませんので、一生懸命に頑張ります。」という祈りを捧げてください。それとともに、「今日一日の間に私のところへやって来るいろいろな痛み、悩みを償いとしてたくましく受け入れられるように導いてください。」という願いも祈ってください。このような聖なる生き方をする信者の近くには、悪の勢力は絶対に近づけません。聖人になろうとすることは、結局悪魔をうちやぶることだと思います。皆様は、全員聖人になれます。なぜならば、聖人たちも私たちと同じように、家族もいたし、いろいろな難しさにも囲まれていたからです。聖人というのは、生まれながらに定められたものではありません。考えられないような痛みの中で生きた結果、聖人となったのです。

最後に、トマス・アクィナス聖人の言葉をお伝えして終わりにします。

「あのような方々が聖人になったように、私も聖人になれる。」

皆様にもできます。

アーメン。

ありがとうございました。

(トマス・アクィナス神父様へ、お祝いの(拍手 🙌🙌🙌))